

氏名	増子 真有		
ヨミガナ	マスコ マユ		
学位の種類	博士（学術）		
学位記番号	博美第757号		
学位授与年月日	2024年3月25日		
学位論文等題目	〈論文〉コケ植物の美術解剖学		
論文等審査委員			
（主査）	東京藝術大学	教授	（美術研究科） 布施 英利
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術研究科） 林 卓行
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術研究科） 川瀬 智之

#### （論文内容の要旨）

本論文は、美術解剖学の観点から、コケ植物（蘚苔類）について、その形態的特徴や生態の美的要素を考察したものである。

植物は古来より多くの美術作品のモチーフとして描かれてきたが、花や森と違って、蘚苔類は現代まで美術作品の主となるモチーフになっている例が少ない。しかし苔庭や盆栽、和歌に見られるように、日本の伝統的な視覚芸術、あるいは文学作品においてはしばしば登場する。また近年ではコケテラリウムなどコケそのものを鑑賞する園芸手法も普及しつつある。そこで本論では、コケ植物の美しさを明らかにし、特に「透明感」をキーワードに実験・考察を行った。また研究成果を絵画制作に反映させることを目的とし、過去の表現事例を参考に、コケ群落表面と点描技法との比較を行い、実際に作品を制作した。

本論の内容は以下である。

第1章「蘚苔類とは」では、コケ植物（蘚苔類）の概要について説明し、その分類や維管束植物との構造上の違い（維管束と根がない点、クチクラが薄い点、変水性を持つ点、胞子で繁殖する点など）について説明した。

第2章「コケのミクロ的魅力」ではミクロ的（微視的）視点からコケの美的要素を考察した。透明度を確認するため撮影実験を行い、クチクラの発達が弱いこと、多くの種で細胞層が1層しかないことにより、葉が他に比べて透明度の高いものとなっていることを述べた。さらに胞子を散布する器官である「胞子体」の種ごとの特徴についても紹介した。

第3章「コケのマクロ的魅力」ではマクロ的（巨視的）視点での見え方について考察した。群落状態でのコケを鑑賞する際の特徴として、自然の風景の中での種と環境による群落の見え方の差異を述べ、そしてその小ささゆえにまず“群落”や“塊”として見えてくる点をコケの特徴として挙げた。さらに変水性に伴う群落の色彩変化についても実験考察を行った。これらにより、群落で見ると単体で見るとの両方でコケの鑑賞ポイントが大きく異なることが明らかになり、ミクロ/マクロ（とセミマクロ）を行き来しながら楽しめる植物であることを述べた。また、多くの種で基底物の表面を覆うように広がるため、陸上植物の中で最も「平面的な」植物であると結論づけた。

第4章「コケ植物と絵画 ～コケと点描～」では、これまでコケがどのように表現されてきたかを述べたのち、コケを絵画に翻訳した例として東洋の絵画技法である「点苔技法」を挙げ、点苔をベースにコケの絵画における扱われ方について考察した。レンズ登場以前において、コケは「点」あるいは「円」として様式化され、画面の中で補佐的な役割をする植物であったと考えられた。形にできない植物であり、主たるモチーフにはなり得なかったのだと思われる。一方、コケ群落（特に茎葉体で直立性のもの）は植物体の小ささゆえに群落表面を同一平面として捉えることができるため、コケ群落を植物製の点描と考えることが可能ではないかという筆者の考えに基づき、点描とコケの群落を比較・考察した。絵画の中の「白」と三次元空間の中の「黒」の特性を述べたのち、これまでの論を踏まえ、コケ群落は新印象派の点

描的な「透明性」、植物体によるリテラルな奥行きと、黒（影）による「宇宙的空間」、などを併せ持つ美術的に興味深い植物であるとした。また自然下におけるコケ群落において印象派的な（印象派の画面に類似した）色彩が見られることを述べ、花や樹々とは少し異なる“美”を持つのではないかと結論づけた。最後に第 5 章では、はじめに絵画以外の表現例としてコケテラリウムを紹介したのち、筆者自身が制作したコケ作品について紹介を行った。点として抽象化されていたコケを、その点の要素を取り入れつつ、形態をできるだけ抽象化して、コケの透明感やみずみずしさをモチーフとして制作を行った。

本論では、美術解剖学という手法をこれまでのヒトや動物ではなくコケ（植物）に広げたところに重要性があると考え。今後の展望としては、同じように美術解剖学の俎上で語られてこなかった事柄や事象について広く応用し、考察を広げる事が考えられる。

また本論においては主に美術との関わりについて考察してきたが、そのほかの芸術（音楽など）への活用方法についても未だ検討の余地があるように思われる。また、変水性、倒木更新を筆頭とした「生と死の境」を考えるきっかけとしても、コケ植物は存在感を現すかもしれない。

コケは実に美しく、人間の文化の隣にある植物である。絵の具を用いた表現だけではなく、インスタレーションやテラリウムアートなど、実際のコケを用いた芸術についても視野を広げながら、コケの美について考察を深めていきたい。

#### （総合審査結果の要旨）

本研究は、コケ植物をモチーフとした絵画作品の制作に取り組んでいる筆者が、美術解剖学の手法から、コケの美と絵画の素材としての魅力に迫ったものである。

筆者の増子真有は、本研究科の修士・博士課程において、美術解剖学研究室で自然と芸術の美の関係について探究を続けてきた。また本学部・油画専攻の卒業制作においても、植物の葉緑体を素材として扱った作品を提出し、長く植物を使った美術表現の研究に取り組んできた。本論文では、植物の中でも、特にコケを対象を絞った。

本論の内容は以下である。

第一章「蘚苔類とは」では、植物学・解剖学の観点からコケ植物の特徴を整理することを試みた。特に、美術とつながる視覚的な特性を探求した。

続く第二章「コケのミクロの魅力」では、樹木などに比べて小さな植物であるコケについて、視点をグッと近づけて、種子植物などとの比較を通して、その「透明性」を明らかにする実験を行った。そこにコケの身が持つ、独自の美を明らかにした。

第三章「コケのマクロ的魅力」では、コケの群落の全体を俯瞰するような視点から、平面的に広がるコケの空間的な魅力について考察した。

第四章「コケ植物と絵画」では、自然のコケから目を転じ、美術作品におけるコケについて取り上げた。またそれを描き表現する手法についても分析を加えた。

最後に第五章では、そこまでの研究を踏まえ、筆者自身がコケを絵画作品として、どのように表現してきたかが、実作を交えて説明された。

美術解剖学という分野は、本来、人体の形態と構造を研究し、それを美術作品に応用する学問である。あるいは人体の幅を広げて、動物、さらには植物（の花や森）などの美を対象とするものである。そんな中であって、本研究は植物の中でも、さらに原始的な生物であるコケ植物という、いまだ誰も取り組んでいないモチーフを研究テーマとして取り上げ、それを自然と美術を交差させるという美術解剖学の手法で取り組んだものである。

その取り組みは、美術表現に新しい視点を提供するとともに、コケ植物の研究にも芸術の分野から寄与することになると評価できる。そもそもコケは、京都の庭園をはじめ、美術・デザインとも親しいものであるが、それをさまざまな視点からアプローチし、コケの美の魅力を引き出した本研究は画期的であり、よって本論文を東京藝術大学・大学院美術研究科の博士論文として合格とする。